

# 介護職員の高齢者ケアに関する認識の日韓比較研究 ケアに対する認識と自尊感情に着目した分析

A comparative study of Japanese and South Korean careworkers' awareness of geriatric care

An analysis focusing on care awareness and feelings of self-esteem

古川 和稔 1) Kazutoshi Furukawa

野田由佳里 1) Yukari Noda

柴崎かがり 2) Kagari Shibazaki

白 種 煜 3) Back Jong Uk

1) 聖隷クリストファー大学社会福祉学部介護福祉学科

Department of Social-Care Work, School of Social Work, Seirei Christopher University  
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

2) Department of Behavioural and Social Sciences, School of Human and Health Sciences,  
University of Huddersfield (英国)

3) Department of Social Welfare, Catholic Sangji College (韓国)

## 介護職員の高齢者ケアに関する認識の日韓比較研究 ケアに対する認識と自尊感情に着目した分析

**キーワード:** 日本、韓国、介護職員、ケアに対する認識、自尊感情

### 抄録

本研究の目的は、日本と韓国の介護職員の高齢者ケアに関する認識を比較し、両国間の差異や課題を検討することである。日本では9施設へ質問票345通、韓国では6施設へ質問票265通を郵送した。日本では195通（有効回収率56.5%）、韓国では147通（有効回収率55.5%）の有効回答が得られた。本稿では介護職員のみを分析対象とするため、日本（137名）、韓国（139名）のデータを分析した。

本研究により、日本の介護職員は韓国の介護職員と比べ、介護の仕事について自らは「専門性が高く、社会的に意義のある仕事」と認識している一方で、「世間からの評価が低い仕事」と認識していることが分かった。その認識の低さが、仕事の満足度の低さ、自尊感情の低さにつながっていると考えられる。一方、韓国の介護職員は高い自尊感情を示したが、この高い自尊感情に対しては、第三者による業務評価の機会を設けるなどの対応により、一定水準のケアレベルを保つ仕組みを検討する必要があると考える。

### 1. 緒言

東アジアでは今後、世界でも例をみないほど急速に高齢化が進行すると予測されている。2015年の高齢化率は、日本（26.7%）が世界で最も高く、イタリア（22.4%）、スウェーデン（19.9%）、スペイン（18.8%）と欧州各国が続いており、東アジア諸国は、韓国（13.1%）、シンガポール（11.7%）、タイ（10.5%）、中国（9.6%）である<sup>1)</sup>。しかし、2050年の高齢化率は、日本（37.8%）、韓国（34.2%）、香港とシンガポール（32.6%）と推計されており、世界の上位を東アジア諸国が独占すると予測されている<sup>2)</sup>。

公的介護サービスという点では、日本と韓国が先行しており、それに台湾が続くという状況である。日本は介護保険制度

（2000年施行）、韓国は老人長期療養保険制度（2008年施行）により、すでに両国には権利としての介護サービス利用が保障されている<sup>3,4)</sup>。また、介護サービスを提供する専門職として、日本では介護福祉士、韓国では療養保護士が、いずれも国家資格として制度化されている。台湾では2008年に介護保険制度を導入予定だったが、経済状況の悪化により延期されている。高齢者ケアのあり方については各国で対応が検討されているが、制度やサービスの検討のみならず、介護職員の高齢者ケアに関する認識も、介護の社会化においては重要な要素の一つである。このような状況から、東アジア諸国の今後の高齢化対策を検討するうえでは、長期療養型ケアシステムが法的に整備さ

れている日本と韓国を対象に、介護職員の高齢者ケアに関する認識を分析しておく必要があると考える。

介護に関して日本と韓国を比較した先行研究は、福祉の市場化、介護サービスの利用支援機関、介護費用と家族介護の評価などがある<sup>5,6,7)</sup>が、実際に介護サービスを提供している介護職員自身の認識を比較検討し、両国間の差異や課題を見出すことを目的とした研究は、筆者が検索した範囲では見当たらない。そこで今回、急速な高齢化が進む東アジアにおける高齢者ケアのあり方を探索することの第一歩として、日韓両国の介護職員の、高齢者ケアに関する認識を比較することとした。「高齢者ケアに関する認識」といっても、研究者の視点によって捉え方は様々であることから、先行研究を踏まえて、(1) 介護の仕事に対する自己認識、(2) 現在の仕事に対する満足度、(3) 高齢者の生活に関する意識、(4) 介護職員の自尊感情、の4つの視点で調査を実施することとした。その背景を以下に述べる。

#### (1) 介護の仕事に対する自己認識

わが国の介護職員の対象とした研究では、介護職員自身の仕事に対する認識が、仕事のやりがいやバーンアウトに影響していることが報告されている<sup>8,9)</sup>。例えば古川<sup>10,11)</sup>は、介護職員自身の「専門性の認識の欠如」が離職やバーンアウトに大きく影響していることを、質的研究、量的研究のいずれからも報告している。筆者が検索した範囲では、韓国の介護職員を対象とした同様の研究は見当たらなかったが、宣<sup>12)</sup>は韓国の介護実践現場について、「専門性の低い療養保護士の養成と介護人材の質、療養保護士の劣悪な労働環境、低いサービスの質など、未だに解決されない課題も多い」と述べている。また、壬生と金<sup>13)</sup>は、不安定な雇用形態や賃金水準の低さを示した上で、社会的専門職としての認知度や評価について指摘している。これらから推察するに、韓国においても、仕事のやりがい、離職に関する課題が生じていると考えられる。そこで、本研究では第一の視点として、「介護の仕事に対する自己認識の日韓比較」に焦点を当てることとした。

#### (2) 現在の仕事に対する満足度

介護労働安定センターが実施した「平成27年度介護労働実態調査」<sup>14)</sup>のうち、介護労働者を対象とした「介護労働者の就業実態と就業意識調査」によると、介護職員が複数回答可の設問に対して選択した「労働条件等の不満」は、「人手が足りない」が50.9%、「仕事内容のわりに賃金が低い」が42.3%の順になっている。同調査のうち、事業所を対象とした「事業

所における介護労働実態調査」では、従業員の過不足感について、「大いに不足」(7.5%)、「不足」(23.0%)、「やや不足」(30.8%)であり、これらの合計は61.3%となることから、労使双方とも人員不足を課題として感じていることが多と思われる。賃金に関しては、介護職員は低賃金であるという論調を目にする機会があるが、山田と石井<sup>15)</sup>は、総務省「就業構造基本調査(2002年・2007年)」の2時点の個票データを用いて、45万世帯100万人という膨大なデータを分析している。精緻なデータ分析の結果、「性別、年齢、学歴、勤続年数、従業上の地位(正規・非正規)、事業所規模、留保賃金など、さまざまな要素を勘案すると、介護職の賃金水準は(看護師よりは低いとはいえ)全産業の中間からやや上に位置する」と述べており、正規職員の場合は、少なくとも、他の産業と比較して極端に低賃金ということはないと考えられる。しかし、介護職員自身は「仕事内容のわりに賃金が低い」と認識しており、仕事に対する大きな不満になっているということは課題である。日本の介護福祉士に相当する韓国の療養保護士の賃金について、442名のデータを分析した金と石川<sup>16)</sup>の調査によると、「療養保護士の月平均所得は、120万ウォンから140万ウォン台が50%以上を占めている。韓国における正規の職員として働いている労働者の一般的な月平均所得は、約282万ウォンであり、療養保護士の給与は月平均約100万ウォン以上の低い額である」と報告している。また、金<sup>17)</sup>は、療養保護士の報酬について、入所施設の平均が月130万ウォンであるとし、飲食店の従業員が住み込みで月220万ウォンであることと比較して、「他の労働者よりも低いのが現状である」と述べている。これらの先行研究から、韓国の介護職員の賃金は、少なくとも他の産業と比べて高いということはないと思われるが、介護職員自身が、それをどのように認識しているかは明らかではない。このような背景から、本研究では第二の視点として、「現在の仕事に対する満足度の日韓比較」に焦点を当てることとした。

#### (3) 高齢者の生活に関する意識

介護職員が高齢者の生活に関してどのような意識をもっているかは、ケアの質や仕事に対する認識に影響を与えると考えられる。高齢者の生活に関する意識について宣<sup>18)</sup>は、「日本と韓国は、高齢者の介護は家族が担うべきという考え方が強い儒教文化圏として西欧諸国からみられている」と述べているが、実際には日韓両国でその意識に差があるのではないかという点

居の割合が高いことが特徴で、65 歳以上の高齢者のいる世帯で三世帯同居世帯の占める割合は、1975 年には半数を超える 54.4%であった。しかし、2015 年には 12.2%に減少している。他方、単独世帯と夫婦のみ世帯の占める割合が増加を続けており、2015 年では、単独世帯は 26.3%、夫婦のみ世帯は 31.5%となっている<sup>19,20)</sup>。韓国も同様で、高齢者世帯における三世帯同居世帯は、1990 年の 47.6%から、2010 年には 6.1%となり、その割合が短期間で大幅に減少している<sup>21)</sup>。このような背景から、本研究では第三の視点として、「高齢者の生活に関する意識」に焦点を当てることとした。

#### (4) 介護職員の自尊感情

介護職員の仕事のやりがいに着目したわが国の先行研究<sup>22,23)</sup>によると、やりがいの増強やケアの質向上のためには、介護職員自身の自尊感情を高めることが大切だと指摘しているものがある。自尊感情とは、自尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情である<sup>24)</sup>。自尊感情を測定する際に最も多く用いられている尺度に Rosenberg 自尊感情尺度があるが、この尺度で測定している自尊感情は、自分を他者と比べて自信を感じるとか、優越感をもつといったものではなく、自分自身に対して尊敬でき、価値ある人間ととらえることができる程度とされている<sup>25)</sup>。自尊感情の解釈については、ソシオメーター理論が非常に興味深い。ソシオメーター理論では、自尊感情を「自分と他者との関係を監視する心理的システムである」とし、「主観的な自尊感情とは、他者からの受容の程度を示す計器（メーター）である」ことを基本前提としている。すなわち、自尊感情が高まるということは、自分が他者から認められているというシグナルであり、逆に自尊感情が低くなるということは、他者から認められていないというシグナルであると解説されている<sup>26)</sup>。自尊感情の国際比較では、たとえば木野と速水<sup>27)</sup>は、日本、韓国、シンガポール（中国系）、カナダ（アジア系）、アメリカ（白人）の大学生の自尊感情を比較した結果、アメリカ、韓国、シンガポール、カナダ、日本の順となり、日本の大学生が最も低かったと報告している。自尊感情については、介護職員のやりがいの増強やケアの質に影響を与えると考えられることから、本研究では第四の視点として、「介護職員の自尊感情」に焦点を当てることとした。

## II. 研究目的

本研究の目的は、日本と韓国の介護職員の高齢者ケアに関する認識を比較し、両国間の差異や課題を検討することである。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象者

#### (1) 日本の調査対象者

筆者と関わりがある日本国内の A 県老人福祉施設協議会に協力を要請し、同協議会内に設けられた 12 の委員会の委員長が責任者を務める 12 施設に調査への協力を打診した。書面により調査協力の回答が得られた 7 施設と、日本の共同研究者と関わりがある A 県内の 2 施設の、合わせて 9 施設に勤務する、介護職員、生活相談員、施設ケアマネジャー、看護職員、リハビリテーション専門職員、栄養士など、ケアに関わる全職員を対象とした。A 県老人福祉施設協議会は、2012 年以降、筆者が研究を通して関わりがあることから、調査への協力が得られやすいと考え、研究への協力を要請した。また、研究計画の段階で、日本と韓国それぞれで 200 名ほどのデータ収集を予定していたことから、A 県老人福祉施設協議会から協力の回答を得られた 7 施設のみでは回答数が不足すると考え、同じ A 県内にある、共同研究者と関わりがある 2 施設を追加した。この 9 施設の施設種別は、特別養護老人ホームが 7 施設、養護老人ホームが 1 施設、ケアハウスが 1 施設である。

#### (2) 韓国の調査対象者

韓国の共同研究者と関わりがある韓国内の B 市内に所在する特別養護老人ホームのうち、書面により調査協力の回答が得られた 6 施設に勤務する、介護職員、生活相談員、看護職員、リハビリテーション専門職員、栄養士など、ケアに関わる全職員を対象とした。

### 2. 調査期間

日本、韓国とも、2016 年 6 月 20 日から 2016 年 9 月 30 日の期間に調査を実施した。

### 3. 調査方法

#### (1) 質問票配布と回収の手続き

##### ① 日本での質問票配布と回収の手続き

郵送法による自記式質問紙調査である。2016 年 6 月、

調査対象の全ての施設長あてに、研究目的、方法、倫理的配慮等を記載した文書を郵送し、任意による研究への参加の意思を確認するとともに、調査票の配布部数を確認するために、各施設の職員数の回答を求めた。その後、回答があった職員数に予備として10通加えた数を発送した。質問票1通ごとに返信用封筒1通をクリップ止めし、回答後に回答者自身が封緘して直接研究者宛てに返信出来るようにした。この手続きにより、2016年6月に、9施設へ質問票345通を郵送した。

## ② 韓国での質問票配布と回収の手続き

基本的には、前述の日本での手続きと同様である。郵送法による自記式質問紙調査で、2016年6月、調査対象の全ての施設長あてに、研究目的、方法、倫理的配慮等を記載した文書を郵送し、任意による研究への参加の意思を確認するとともに、調査票の配布部数を確認するために、各施設の職員数の回答を求めた。

その後、回答があった職員数に予備として10通加えた数を発送した。質問票1通ごとに返信用封筒1通をクリップ止めし、回答後に回答者自身が封緘して直接研究者宛てに返信出来るようにした。この手続きにより、2016年6月に、6施設へ質問票265通を郵送した。

## (2) 調査内容

緒言で述べた通り、本研究は(1)介護の仕事に対する自己認識、(2)現在の仕事に対する満足度、(3)高齢者の生活に関する意識、(4)介護職員の自尊感情、の4つの視点で日本と韓国の介護職員の認識を比較検討する調査である。質問項目は先行研究を踏まえて、共同研究者間で繰り返し議論し、方向性を定めていった。調査内容は以下の通りである。

回答形式は、間隔尺度として扱う場合には7件法が望ましいとの意見もあったが、回答の容易さを重視し、選択肢を減らした。また、回答者の「曖昧さ」を避けるため、以下の①～③の質問項目では5件法ではなく、「1:全くそう思わない」、「2:そう思わない」、「3:そう思う」、「4:強くそう思う」の、ものさし付4件法を採択した。④の回答形式については後述する。

### ① 介護の仕事に対する自己認識

介護の仕事の自己認識については、「専門性の高い仕事か」と「社会的に意義のある仕事か」の2点について、「自分自身でどう認識しているか」と、「世間からどう評価されていると思うか」という観点で質問項目を設定した。具体的には、

「私は、介護の仕事は『専門性の高い仕事』だと思う」、「私は、介護の仕事は『社会的に意義のある仕事』だと思う」、「介護の仕事は、世間から『専門性の高い仕事』とされている」、「介護の仕事は、世間から『社会的に意義のある仕事』とされている」の4問である。

### ② 現在の仕事に対する満足度

現在の仕事の満足度については、先行研究から、給与や人員(勤務体制)の問題が影響していると考えられたことから、給与、仕事内容、勤務体制、仕事への熱意について質問項目を設定した。具体的には、「現在の給与に満足している」、「現在の仕事内容に満足している」、「現在の勤務体制に満足している」、「現在の仕事に熱意をもって取り組んでいる」の4問である。

### ③ 高齢者の生活に関する意識

高齢者の生活に関する意識については、介護職員自身の生活感や価値観が影響すると考え、「高齢者は、施設ではなく、自宅で暮らした方が良い」、「高齢の親の世話は子どもがすべきである」、「可能であれば三世同居が望ましい」、「祖父または祖母との同居経験が十分にある」の4問を設定した。

### ④ 介護職員の自尊感情

「自尊感情」については、国内外の研究において頻繁に使われている尺度であることから、10項目で構成されるRosenbergの自尊心尺度<sup>28)</sup>を用いた。回答形式は他の質問と同様に、「曖昧さ」を排除するために、ものさし付4件法を採択し、「1:あてはまらない」、「2:ややあてはまらない」、「3:ややあてはまる」、「4:あてはまる」とした。Rosenberg自尊感情尺度について内田と上埜<sup>29)</sup>は、日本では多くの翻訳版が存在していること、質問の翻訳が同じであっても、選択肢の数が4件法から7件法まで存在することを問題提起している。その上で、海外での使われ方の多くは4件法であると述べていることから、本研究で4件法を用いたことは問題ないとする。

### ⑤ 基本属性

「基本属性」については、回答者が勤務している施設の種別、職種、性別、年齢、所有資格、介護福祉士国家資格所有者には資格取得ルート、福祉や医療の仕事の通算経年数、現在勤務している職場での勤務年数、雇用形態に関する質問項目を設定した。

## ⑥ 質問票の翻訳

韓国語への翻訳は、共同研究者の Back Jong Uk が行った。

## (3) 分析方法

まず、「介護の仕事に対する自己認識」(4問)、現在の仕事に対する満足度(4問)、高齢者の生活に関する意識(4問)の、計12項目について、それぞれの質問項目ごとに回答分布をグラフ化し、日本と韓国の結果を比較した。次に、「自尊感情」を構成する10項目について、日本と韓国の回答分布を一覧にし、かつ、質問項目ごとに日本と韓国の回答分布について $\chi^2$ 検定を行った。また、参考として、それぞれの質問項目ごとに、日本と韓国それぞれの平均値も算出した。なお、すべての統計処理は、SPSS Statistics 22 for Windows を用いた。

## (4) 倫理的配慮

調査票の表紙に「回答者の権利やプライバシー、研究倫理に関する約束」を添付し、回答は自由意思であること、アンケートの提出をもって研究協力に同意したと判断させていただくことを明記した。なお、本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を受け、承認を得てから実施した(認証番号16003)。

# IV. 研究結果

## 1. 回答者の基本属性

日本では195通(有効回収率56.5%)、韓国では147通(有効回収率55.5%)の有効回答が得られた。日本と韓国を対比させた回答者の基本属性を表1に示す。ただし、本稿では、研究目的に沿って介護職員のみを分析対象として抽出した。日本では、137名の介護職員から回答が得られたが、うち1名は自尊感情に関する質問には未回答だったため、自尊感情の分析対象は136名、それ以外の質問の分析対象は137名となった。韓国では、介護職員139名から得られた回答を分析対象とした。

表1 回答者の基本属性(日本:n=195、韓国:n=147)

項目 カテゴリー	日本 人数 (割合)	韓国 人数 (割合)
性別		
女性	129 (66.2)	101 (68.7)
男性	66 (33.8)	46 (31.3)
年齢		
10歳代	2 (1.0)	0 (0.0)
20歳代	62 (31.8)	46 (31.3)
30歳代	53 (27.2)	16 (10.9)
40歳代	48 (24.6)	42 (28.6)
50歳代	22 (11.3)	40 (27.2)
60歳代	6 (3.1)	3 (2.0)
不明(未回答)	2 (1.0)	0 (0.0)
職種		
介護職員	137 (70.3)	139 (94.6)
生活相談員	20 (10.3)	5 (3.4)
施設ケアマネジャー	3 (1.5)	* *
看護職員	22 (11.3)	1 (0.7)
機能訓練指導員(PT,OT含む)	1 (0.5)	1 (0.7)
管理栄養士・栄養士	6 (3.1)	1 (0.7)
その他	6 (3.1)	0 (0.0)
医療や福祉の仕事の経験年数		
1年未満	8 (4.1)	1 (0.7)
1年～3年未満	13 (6.7)	17 (11.6)
3年～5年未満	33 (16.9)	30 (20.4)
5年～10年未満	58 (29.7)	51 (34.7)
10年～15年未満	51 (26.2)	28 (19.0)
15年以上	29 (14.9)	20 (13.6)
不明(未回答)	3 (1.5)	0 (0.0)
所有資格(重複回答あり。割合はnに対する割合)		
介護福祉士(韓国は療養保護士)	125 (64.1)	106 (72.1)
社会福祉士(韓国は1級と2級の合計)	15 (7.7)	134 (91.2)
看護師	16 (8.2)	2 (1.4)
准看護師	12 (6.2)	22 (15.0)
ヘルパー2級	79 (40.5)	* *
ヘルパー1級	4 (2.1)	* *
介護職員基礎研修修了	11 (5.6)	* *
保育士	2 (1.0)	8 (5.4)
精神保健福祉士	0 (0.0)	* *
介護支援専門員	27 (13.8)	* *
雇用形態		
正規職員	169 (86.7)	124 (84.4)
非正規雇用(常勤パート)	18 (9.2)	23 (15.6)
非正規雇用(短時間パート)	3 (3.1)	0 (0.0)
不明(未回答)	2 (1.0)	0 (0.0)

\*:韓国にはない資格

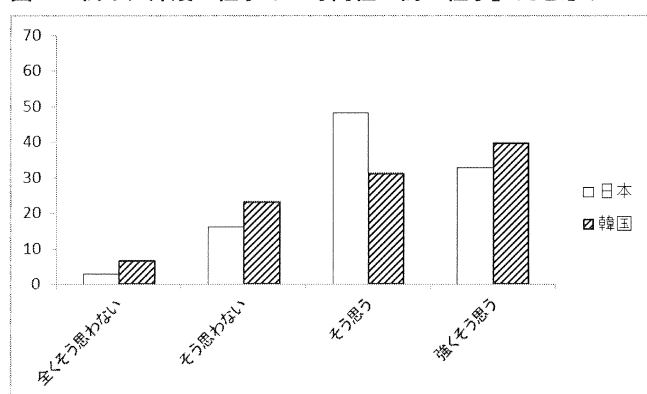
## 2. 介護の仕事に対する自己認識

### (1) 介護の仕事に対する自分自身の認識

「私は、介護の仕事は『専門性の高い仕事』だと思う」という質問に対する肯定的回答(強く思う+そう思う;以下も

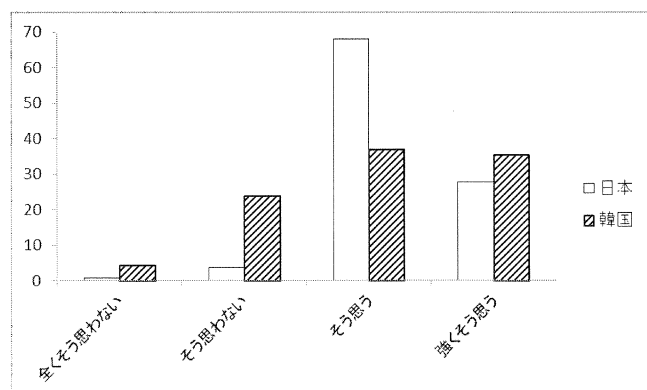
同様の割合を比較すると、日本（81.0%）、韓国（70.5%）と、10.5 ポイント日本が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（32.8%）、韓国（39.6%）と、やや韓国が上回ったが、「そう思う」では日本（48.2%）、韓国（30.9%）と、日本が大きく上回った（図1）。

図1 私は、介護の仕事は「専門性の高い仕事」だと思う



「私は、介護の仕事は『社会的に意義のある仕事』だと思う」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（95.6%）、韓国（72.0%）であり、23.6 ポイント日本が上回った。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（27.7%）、韓国（35.3%）と、やや韓国が上回ったが、「そう思う」では日本（67.9%）、韓国（36.7%）と、日本が大きく上回った（図2）。

図2 私は、介護の仕事は「社会的に意義のある仕事」だと思う



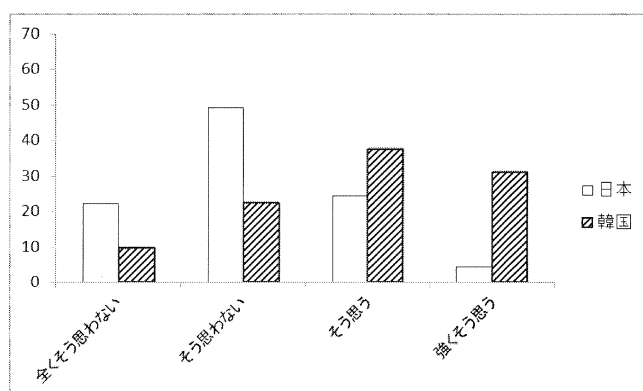
「介護の仕事に対する自己認識」では、2問とも、日本の方が肯定的回答の割合が高かった。

## (2) 介護の仕事に対する「世間からの評価」に関する認識

「介護の仕事は、世間から『専門性の高い仕事』とされている」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日

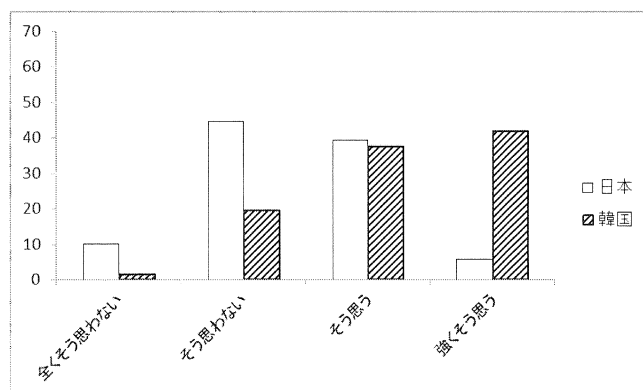
本（28.7%）、韓国（68.3%）で、実に 39.6 ポイントも韓国が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（4.4%）、韓国（30.9%）、「そう思う」では日本（24.3%）、韓国（37.4%）と、いずれも韓国が大きく上回った（図3）。

図3 介護の仕事は、世間から「専門性の高い仕事」とされている



「介護の仕事は、世間から『社会的に意義のある仕事』とされている」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（45.2%）、韓国（79.1%）で、前述の「専門性に関する世間からの認識」と同様に韓国が大きく上回り、その差は 33.9 ポイントであった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（5.8%）、韓国（41.7%）と大きく韓国が上回ったが、「そう思う」では日本（39.4%）、韓国（37.4%）と、わずかに日本が上回った（図4）。

図4 介護の仕事は、世間から「社会的に意義のある仕事」とされている



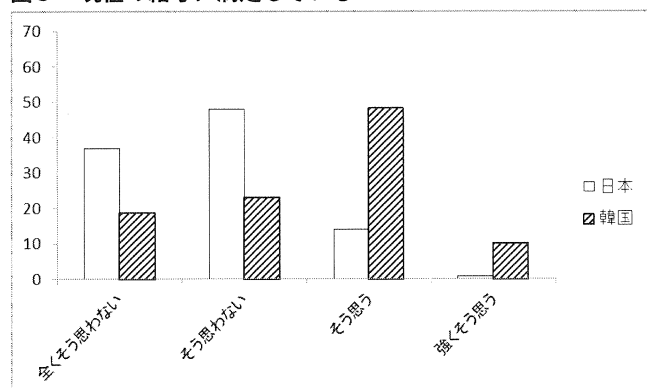
「世間からどう思われているか」については、「介護の仕事に対する自己認識」とは対照的に、2問とも韓国の方が肯定的回答の割合が非常に高い結果となった。

## 2. 現在の仕事に対する満足度

現在の仕事に対する満足度は、給与、仕事内容、勤務体制の満足度に加え、仕事への熱意について質問した。

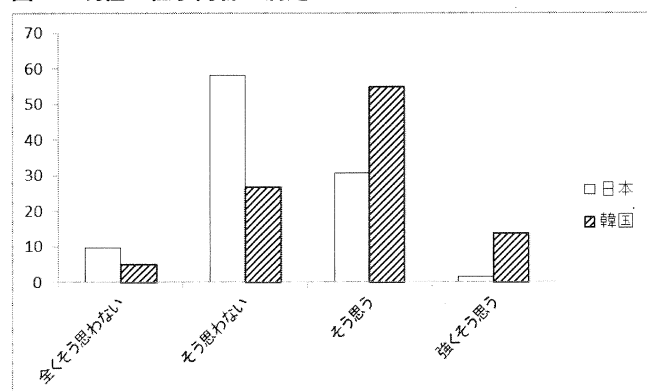
「現在の給与に満足している」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（14.8%）、韓国（58.3%）で、43.5ポイント差で韓国が上回った。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（0.7%）、韓国（10.1%）、「そう思う」では日本（14.1%）、韓国（48.2%）と、いずれも韓国が上回った（図5）。

図5 現在の給与に満足している



「現在の仕事内容に満足している」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（32.1%）、韓国（68.4%）と大きく韓国が上回り、その差は36.3ポイントであった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（1.5%）、韓国（13.7%）、「そう思う」では日本（30.6%）、韓国（54.7%）と、いずれも韓国が上回った（図6）。

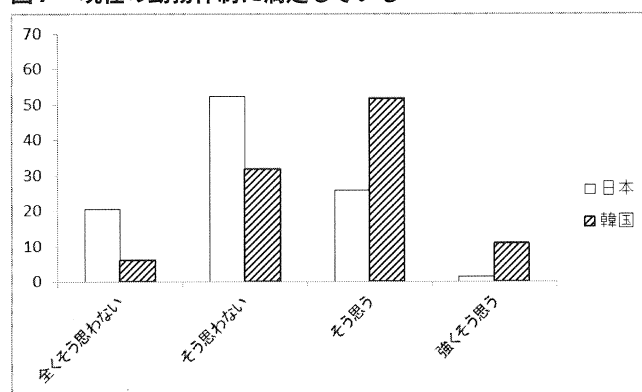
図6 現在の仕事内容に満足している



「現在の勤務体制に満足している」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（27.2%）、韓国（62.6%）と、

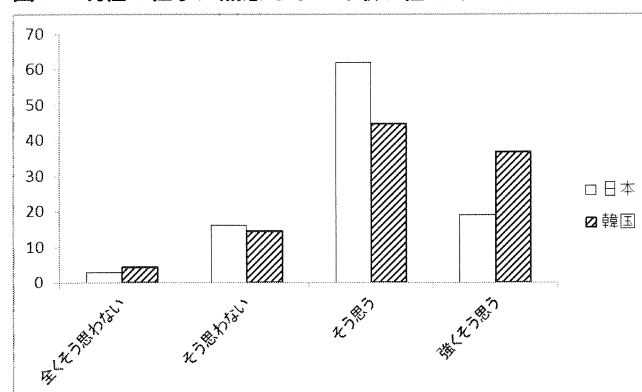
ここでも35.4ポイント差で韓国が上回った。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（1.5%）、韓国（10.8%）、「そう思う」では日本（25.7%）、韓国（51.8%）と、いずれも韓国が上回った（図7）。

図7 現在の勤務体制に満足している



「現在の仕事に熱意をもって取り組んでいる」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（81.0%）、韓国（81.3%）であり、日韓両国とも高い値ながら、韓国が若干高い割合を示した。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（19.0%）、韓国（36.7%）と韓国が大きく上回ったが、「そう思う」では日本（62.0%）、韓国（44.6%）と、日本が大きく上回った（図8）。

図8 現在の仕事に熱意をもって取り組んでいる

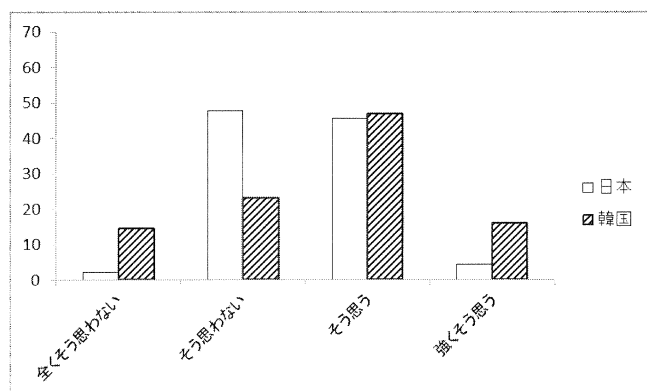


「現在の仕事に対する満足度」における肯定的回答の割合は、給与では43.5ポイント、仕事内容では36.3ポイント、勤務体制では35.4ポイントと、いずれも韓国が日本を大きく上回った。仕事への熱意については、両国とも80%以上が肯定的回答を示し、わずかながら韓国が日本を上回った。

### 3. 高齢者の生活に関する認識

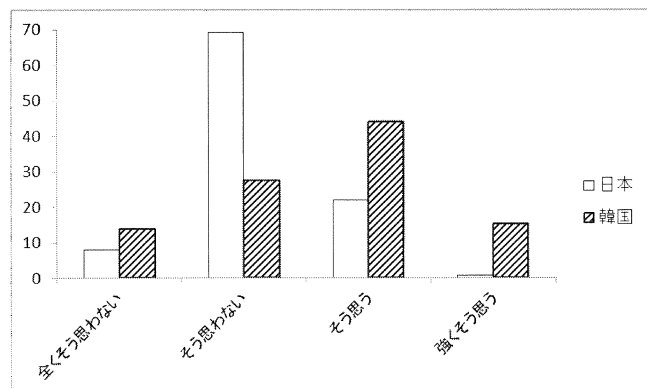
「高齢者は、施設ではなく、自宅で暮らした方が良い」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（50.0%）、韓国（62.6%）であり、12.6 ポイント韓国が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（4.4%）、韓国（15.8%）、「そう思う」は日本（45.6%）、韓国（46.8%）と、いずれも韓国が上回った（図9）。

図9 高齢者は、施設ではなく、自宅で暮らした方が良い



「高齢の親の世話は子どもがすべきである」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（22.6%）、韓国（59.0%）であり、36.4 ポイント韓国が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（0.7%）、韓国（15.1%）、「そう思う」は日本（21.9%）、韓国（43.9%）と、いずれも韓国が上回った（図10）。

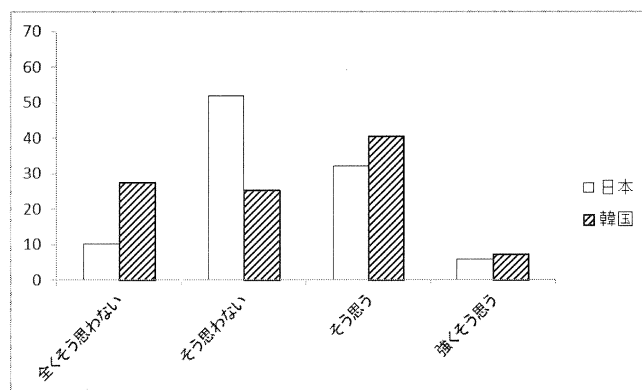
図10 高齢の親の世話は子どもがすべきである



「可能であれば三世代同居が望ましい」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（37.9%）、韓国（47.5%）であり、9.6 ポイント韓国が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（5.8%）、韓国（7.2%）、「そう思う」

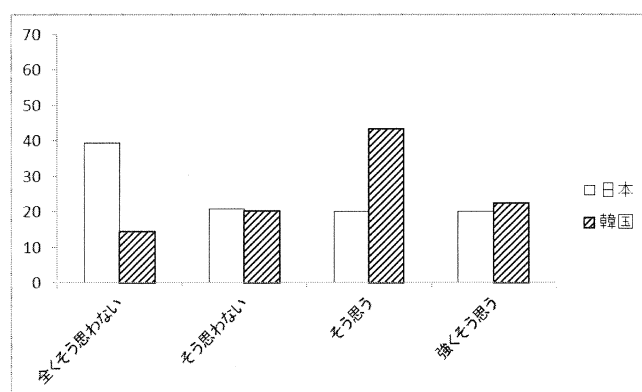
は日本（32.1%）、韓国（40.3%）と、わずか差ではあるが、いずれも韓国が上回った（図11）。

図11 可能であれば三世代同居が望ましい



「祖父または祖母との同居経験が十分にある」という質問に対する肯定的回答の割合を比較すると、日本（40.0%）、韓国（65.5%）であり、25.5 ポイント韓国が高かった。回答分布を比較すると、「強くそう思う」では日本（20.0%）、韓国（22.3%）、「そう思う」は日本（20.0%）、韓国（43.2%）と、いずれも韓国が上回った（図12）。

図12 祖父または祖母との同居経験が十分にある



「高齢者の生活に関する認識」における肯定的回答の割合は、「高齢者は、施設ではなく、自宅で暮らした方が良い」では12.6 ポイント、「高齢の親の世話は子どもがすべきである」では36.4 ポイント、「可能であれば三世代同居が望ましい」では99.6 ポイントと、いずれも韓国が日本を上回った。また、「祖父または祖母との同居経験が十分にある」でも25.5 ポイント韓国が上回った。



#### 4. 自尊感情日本と韓国の比較

自尊感情に関する日本と韓国の意識の相違点を検討するために、自尊感情に関する項目のクロス集計を行った。(表2)に示した通り、全ての項目で有意差がみられた。「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」以外は、全ての項目で日本より韓国の方が肯定する割合が多い結果となった。なお、表2に記載の質問項目のうち、冒頭に◆印をつけた項目は逆転項目であり、得点を反転させて入力した。

参考として算出した、質問項目ごとの平均値を比較すると、両国で最も回答に差があった項目は「だいたいにおいて、自分に満足している」(日本:2.3、韓国:3.1)で、0.8ポイントの差であった。次に差が大きかった項目は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」(日本:2.8、韓国:3.4)、「自分に対して肯定的である」(日本:2.4、韓国:3.0)、「自分は全くだめな人間だと思うことがある(逆転項目)」(日本:2.4、韓国:3.0)で、いずれも0.6ポイント差であった。

表2 自尊感情に関する項目(χ<sup>2</sup>検定)

	1	2	3	4	合計	検定	(参考) 平均値
	人数(割合)	人数(割合)	人数(割合)	人数(割合)			
少なくとも人並みには、 価値のある人間である	日本 7(5.1)	33(24.3)	76(55.9)	20(14.7)	136	***	2.8
	韓国 2(1.4)	9(6.5)	59(42.4)	69(49.6)	139		3.4
色々な良い素質をもっている	日本 10(7.4)	47(34.6)	68(50.0)	11(8.1)	136	***	2.6
	韓国 1(0.7)	19(13.7)	89(64.0)	30(21.6)	139		3.1
◆敗北者だと思うことがよくある	日本 12(8.8)	46(33.8)	59(43.4)	19(14.0)	136	***	2.6
	韓国 9(6.5)	46(33.1)	44(31.7)	40(28.8)	139		2.8
物事を人並みには、うまくやる	日本 4(3.0)	41(30.4)	77(57.0)	13(9.6)	135	***	2.7
	韓国 3(2.2)	16(11.5)	75(54.0)	45(32.4)	139		3.2
◆自分には、 自慢できるところがない	日本 30(22.1)	54(39.7)	44(32.4)	8(5.9)	136	***	2.2
	韓国 9(6.5)	57(41.0)	51(36.7)	22(15.8)	139		2.6
自分に対して肯定的である	日本 15(11.0)	57(41.9)	57(41.9)	7(5.1)	136	***	2.4
	韓国 6(4.3)	28(20.1)	64(46.0)	41(29.5)	139		3.0
だいたいにおいて、 自分に満足している	日本 20(14.7)	60(44.1)	51(37.5)	5(3.7)	136	***	2.3
	韓国 2(1.4)	19(13.7)	81(58.3)	37(26.6)	139		3.1
◆もっと自分自身を 尊敬できるようになりたい	日本 47(34.6)	59(43.4)	19(14.0)	11(8.1)	136	***	2.0
	韓国 63(45.3)	59(42.4)	16(11.5)	1(0.7)	139		1.7
◆自分は全くだめな 人間だと思うことがある	日本 25(18.4)	46(33.8)	55(40.4)	10(7.4)	136	***	2.4
	韓国 3(2.2)	46(33.1)	35(25.2)	55(39.6)	139		3.0
◆何かに付けて、自分は 役に立たない人間だと思う	日本 11(8.1)	39(28.7)	64(47.1)	22(16.2)	136	***	2.7
	韓国 6(4.3)	34(24.5)	30(21.6)	69(49.6)	139		3.2

①◆は逆転項目であり、得点を反転させて入力した。

②回答項目は次の通り。1:あてはまらない、2:ややあてはまらない、3:ややあてはまる、4:あてはまる

③数字は人数、カッコ内は%を指す。ただし、「(参考)平均値」の値は、回答の平均値である。

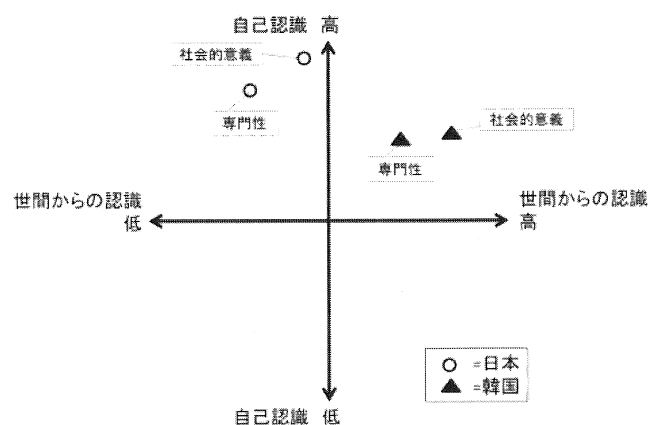
④検定(χ<sup>2</sup>検定):\*\*\* p < 0.001。⑤参考までに、各項目の回答の平均値を算出した。

#### V. 考察

##### 1. 介護の仕事に対する自己認識の日韓比較

介護の仕事に対する認識については、「専門性の高い仕事か」と「社会的に意義のある仕事か」の2点について、「自分自身でどう認識しているか」と、「世間からどう評価されていると思うか」という観点で質問項目を設定した。自分自身の認識と、世間からの評価に対する認識がともに高い値を示すことが、専門職者の認識としては理想であるが、本調査では特徴的な結果を示した。日韓両国の自分自身の認識と、世間からの認識を4象限図で示すと、図13の通りである。

図13 4象限図



自分自身の認識を肯定的回答の割合でみると、日本は81.0%が、韓国は70.5%が「介護の仕事は専門性の高い仕事だと思う」と認識している。しかし、「世間から『専門性の高い仕事』と思われる」に対する肯定的回答は、日本は28.7%であり、自分自身の認識と比較し、実に52.3ポイントも低い結果であった。韓国も、世間からの評価に対する肯定的回答は、自分自身の認識よりも低くはなったものの、それでも68.3%であり、その差はわずか2.2ポイントであった。同様に、「社会的に意義のある仕事である」という質問に対する回答も、自分自身の認識では、日本は95.6%、韓国は72.0%が肯定的回答を示したものの、「世間から『社会的に意義のある仕事』と思われる」に対する肯定的回答は、日本は45.2%であり、自分自身の認識と比較して50.4ポイントも低い結果となった。一方韓国では、世間からの評価に対する認識は79.1%が肯定的回答を示し、自分自身の認識より7.1ポイント高い値を示した。これらの結果から、韓国の介護職員の方が、自分自身の仕

事を肯定的かつバランスよくとらえていると言えよう。ここで着目したいのは、日本の介護職員は、専門性の高さも、社会的意義も、いずれも世間から評価されていないと認識している点である。介護職員自身の「専門性の認識の欠如」が離職やバーンアウトに大きく影響していることは、古川<sup>30,31)</sup>が、質的研究、量的研究のいずれからも報告している。今回は「自分自身の認識」と「世間からどう思われているかという認識」の両面から検討したが、自分自身では専門性も高く、社会的意義のある仕事だと思っているにも関わらず、それらが「世間からは認められていない」という日本の介護職員の自己評価の低さは、専門性の向上や離職防止の観点からも対応が必要な課題であろう。一方、韓国の自己認識の高さが、そのまま韓国の介護実践の現状を反映しているかという点、いささか疑問がある。筆者らは本研究の一環として、韓国において複数の高齢者福祉施設の視察を行ったが、いくつかの施設では身体拘束と思われる場面もあり、少なくともそれらの施設に限って言えば、決して韓国の介護実践状況が、日本と比較して専門性が高く、社会的な評価が高いとは思えなかった。しかしながら、実際に介護業務に従事している職員の認識には日韓で大きな差があった。本研究の結果から考えると、介護職員自身が、自身の仕事が世間からどのように評価されているかを認識する過程は、実際に提供している介護サービスの内容だけが反映されるような単純なものではない。日本では介護人材不足、離職問題、介護福祉士養成校の定員割れ等、介護人材を取り巻く状況の厳しさが課題となっているが、その打開策の一つとして、実践現場からのポジティブな情報発信が必要だと考える。しかし、実際に介護現場で働いている職員自身が自信をもって働けるような環境を整えていかなければ、ポジティブな情報を発信することが困難である。多くの介護実践現場では、現職者研修を定期的に実施しているが、そのような研修の場においても、自らの職業に対する誇りを醸成出来るような仕掛けも検討する必要があると考える。

## 2. 現在の仕事に対する満足度の日韓比較

それぞれの質問に対する肯定的回答の割合を日韓で比較すると、給与、仕事内容、勤務体制の、いずれの項目も韓国が日本を大幅に上回っていた。この結果は、単に「日本と比べて韓国の介護労働環境が良い」ということを示している訳ではない。例えば賃金に関しては、緒言で述べた通り、他の職業との比較という観点からみれば、日本の介護職員の賃金水準が、韓国と比較して極端に低いということは決してない。しかし、本研究

では、韓国の方が給与の満足度が43.5ポイントも高い結果となった。これは、金額の多寡の問題ではなく、仕事の負担感に対する賃金の認識だと推察する。すなわち、韓国の介護職員は「仕事に見合った賃金」と捉えているのに対して、日本の介護職員は「大変な仕事であるにも関わらず、それに見合った賃金ではない」という認識が、「現在の給与に満足している」という設問に対する否定的回答(全くそう思わない+そう思わない)が85.1%という結果に表れているのであろう。同様に、他の項目についても肯定的回答の割合を比較すると、「現在の仕事内容に満足している」では36.3ポイント差、「現在の勤務体制に満足している」では35.4ポイント差で、韓国の方が高い満足度を示した。先行研究では、韓国の介護実践現場について、「専門性の低い療養保護士の養成と介護人材の質、療養保護士の劣悪な労働環境、低いサービスの質など、未だに解決されない課題も多い」<sup>32)</sup>、「不安定な雇用形態や賃金水準の低さ」<sup>33)</sup>が指摘されており、賃金と同様に、韓国の方が仕事内容や勤務体制が整っていて、それに伴い満足度が高いと解釈しにくいというのが筆者の率直な印象である。前段で述べた通り、現地視察の印象からも、少なくとも日本の介護現場が韓国に比べ著しく劣っているとは考えにくい。それにも関わらず、日本の介護職員の満足度が圧倒的に低いという事実は大きな課題であり、ここでも、自身の仕事に誇りをもてるような環境を醸成していく必要があると考える。

## 3. 高齢者の生活に関する意識の日韓比較

近年、日韓両国とも三世帯同居の割合は激減している<sup>34,35,36)</sup>。そういう意味では、両国には共通した家族環境の変化がみられているが、本研究では、設問した4問とも、韓国の方が肯定的回答の割合が高かったが、特にその差が顕著だったのは、「高齢の親の世話は子どもがすべきである」であり、日本(22.6%)に対して、韓国(59.0%)と、肯定的回答の割合の差は36.4ポイントであった。この結果の背景としては、第一に儒教文化の影響が考えられるが、他にも、日本は韓国よりも8年早く介護保険制度を開始していることから、介護の社会化がより浸透している可能性も考えられる。韓国においても今後、介護の社会化が進めば、「高齢の親の世話は子どもがすべきである」という考え方は減少していくことも考えられるが、今後、東アジア諸国で公的介護サービスを検討するうえでは、非常に重要な価値観の一つだと考える。国によって、あるいは同じ国であっても地域によって、価値観や宗教観が異なること

から、「公的介護サービスの充実こそが高齢社会への対応の切り札」と考えることの危険性も考慮しなければならない。時代とともに、あるいは公的介護サービスの普及により変化しうる価値観なのかという観点からも、今後もこの項目については縦断的にデータ収集していく必要があると考える。

#### 4. 自尊感情に関する日韓比較

本研究では、表2に示した通り、「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」を除く9項目で日本は韓国より低い値を示した。先行研究<sup>37)</sup>を鑑みれば、そもそも日本人は自尊感情が低いと考えることも出来るが、本稿では、「介護の仕事に対する自己認識」と、自尊感情のソシオメーター理論をもとに考察を進める。ソシオメーター理論によると、主観的な自尊感情は「他者からの受容の程度を示す計器（メーター）」である<sup>38)</sup>。本研究の結果、介護の仕事に関して、日本は「世間からの評価は低い」と認識し、逆に韓国は「世間からの評価は高い」と認識していた。つまり、他者からの受容の程度は、日本は低く、韓国は高かったことから、自尊感情に関して日本が韓国よりも低かったことは、他者すなわち世間からの評価の低さが影響していると考えられる。

一般的には自尊感情は高い方が良いとされ、自尊感情の高さは精神的健康の表れと解釈されることもある<sup>39)</sup>。しかし、介護実践現場における自尊感情の高さは、社会的適応性などの良い面がある反面、他者からの受容を確信しているので、他者からの評価を気にしないことにより不適切な支援を継続させてしまう危険があるという一面も認識しておかなければならない<sup>40)</sup>。

現在わが国は、介護人材の機能とキャリアパスについて、介護助手等の導入により介護人材のすそ野を拡大するとともに、介護福祉士については、より専門性を向上させるキャリアパスの全体像を示している<sup>41,42)</sup>。このような流れを促進するためには、まずは個々の介護職員が自らの職業に誇りをもつことが大切である。そのためには、様々な機会を通して、介護職員自身が「介護の仕事は世間から評価されている仕事だ」と思えるような働きかけを、戦略的に行う必要があると考える。一方、韓国においては、実践現場では様々な課題を抱えているにも関わらず、「世間から高く評価されている」と認識しているとともに、自尊感情も高いことが明らかになった。自尊感情の高さについては、他者から受容されているという確信により、「現状で良い」という認識を形成する可能性がある。専門性の高い

介護サービスが提供されているのであれば問題は少ないが、そうでない場合には、不適切なケアを継続させるリスクもあるため、教育体制の整備とともに、一層の専門性の向上を図ることが課題だと考える。

#### VI. 本研究の限界

本研究は、日韓両国とも、限られた地域の数施設から得られたデータの分析であり、回答に偏りがある可能性がある。今後は他の地域にも対象を拡大し継続的な調査を進める必要があると考える。

#### VII. 結語

本研究により、日本の介護職員は韓国の介護職員と比べ、介護の仕事について自らは「専門性が高く、社会的に意義のある仕事」と認識している一方で、「世間からの評価が低い仕事」と認識していることが分かった。その認識の低さが、仕事の満足度の低さ、自尊感情の低さにつながっていると考えられる。日本の介護職員に対しては、自らの職業に対する誇りを醸成出来るような仕掛けを検討する必要がある。一方、韓国の介護職員の高い自尊感情に対しては、第三者による業務評価の機会を設けるなどの対応により、一定水準のケアレベルを保つ仕組みを検討する必要があると考える。

本研究は日本と韓国の2国間の比較であるが、高齢者ケアに関する認識、自尊感情ともに大きな違いがあることが分かった。今後、東アジア諸国では高齢化対策が進むと思われるが、それぞれの国の事情に応じた対策を検討する際には、「介護職員の認識」の観点も必要であることが示唆された。

謝辞: 質問紙調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。本研究は、2016年度聖隷クリストファー大学共同研究費（一般研究-10）による成果の一部である。

## 【引用文献】

- 1) 内閣府：平成 28 年版高齢社会白書（全体版），第 1 章第 1 節 5. 高齢化の国際的動向  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s1\\_1\\_5.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s1_1_5.html)（2016 年 11 月 1 日現在）
- 2) 東京大学社会科学研究所全所的プロジェクト研究：東アジア雇用保障資料データ集，第 2 章 世界の人口動態と高齢化社会  
<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/gov/asia-data.html>（2016 年 11 月 1 日現在）
- 3) 増田正暢（編著）：世界の介護保障，第 2 版，192-210，法律文化社，2014.
- 4) 武川正吾，イ・ヘギョン（編）：福祉レジームの日韓比較 社会保障・ジェンダー・労働市場，123-172，東京大学出版会，2006.
- 5) 崔仙姫，禹菊姫，和気純子：日・韓の介護保険制度における福祉の市場化に関する意識の比較分析 介護保険機関への自記式質問紙調査を通して，社会福祉学 56（4）：52-67（2016）.
- 6) 李恩心：介護保険サービスの利用支援機関に関する日韓比較研究 利用プロセスにみる利用支援機能の分析，現代福祉研究 15：21-36（2015）.
- 7) 増田雅暢：介護費用と家族介護の評価に関する日韓比較，厚生 59（15）：36-42（2012）.
- 8) 古川和稔，井上善行，小平めぐみ，他：介護職員の現状（第 2 報）「現在の職場の認識」がバーンアウトに与える影響，自立支援介護学 7（2）：122-128（2014）.
- 9) 古川和稔，井上善行，小平めぐみ，他：介護職員の現状（第 1 報）感情労働がバーンアウトに与える影響，自立支援介護学 7（2）：114-121（2014）.
- 10) 古川和稔：介護福祉士の早期離職に関する質的研究，自立支援介護学，3（2）：78-85（2010）.
- 11) 古川和稔：特別養護老人ホーム介護職員のバーンアウトに関連する要因，保育・教育・福祉研究，10：31-45（2012）.
- 12) 宣賢奎：韓国の老人長期療養保険制度に関する研究動向と今後の研究課題，日本保健福祉学会誌，19（2）：31-50，（2013）.
- 13) 壬生尚美，金美辰：韓国における療養保護士の仕事継続に関する研究，大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究，16：147-154（2014）.
- 14) 介護労働安定センター：平成 27 年度 介護労働実態調査結果について，2016.（2016 年 12 月 12 日現在）
- 15) 山田篤裕，石井加代子：介護労働者の賃金決定要因と離職意向 他産業・他職種からみた介護労働者の特徴，季刊・社会保障研究，45（3）：229-248（2009）.
- 16) 金慧英，石川久展：韓国における療養保護士のバーンアウトの関連要因に関する研究 ソーシャルサポートとコントロール要因を中心に，Human Welfare，6（1）：47-61（2014）.
- 17) 金貞任：韓国の高齢者の介護の社会化と家族介護支援の現状，海外社会保障研究，184：42-56（2013）.
- 18) 前掲 12)
- 19) 厚生労働省：平成 14 年国民生活基礎調査の概要，2002.  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa02/index.html>（2016 年 10 月 26 日現在）
- 20) 厚生労働省：平成 27 年国民生活基礎調査の概要，2015.  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/index.html>（2016 年 10 月 26 日現在）
- 21) 金貞任：韓国の社会保障，（増田雅暢編著）世界の介護保険，第 2 版，135-137，法律文化社，2014.
- 22) 野田由佳里：デイサービスで働く介護職員のワークショップに関する報告書，生活支援学 3：26-33（2014）.
- 23) 野田由佳里：介護職員の仕事のやりがいに関する考察 同一社会福祉法人に勤務する介護職員の傾向性，生活支援学 2：23-31（2013）.
- 24) 内田知宏，上埜高志：Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて，東北大学大学院教育学研究科研究年報，58（2）：257-266（2010）.
- 25) 前掲 24)
- 26) R.M. コワルスキ，M.R. リアリー（編著），安藤清志，丹野義彦（監訳）：臨床社会心理学の進歩 実りあるインターフェイスをめざして，232-248，北大路書房，2001.
- 27) 木野和代，速水敏彦：仮想敵有能感の形成と文化的要因 大学生を対象に，日本教育心理学会総会発表論文集，51，26（2009）.
- 28) 堀洋道（監），山本真理子（編）：心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞，29-31，サイエンス社，

- 2001.
- 29) 前掲 24)
- 30) 前掲 10)
- 31) 前掲 11)
- 32) 前掲 12)
- 33) 前掲 13)
- 34) 前掲 18)
- 35) 前掲 19)
- 36) 前掲 20)
- 37) 前掲 27)
- 38) 前掲 26)
- 39) 黒田祐二, 有年恵一, 桜井茂男: 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係 相互協調的—相互独立的自己観を踏まえた検討, 教育心理学研究, 52: 24-32 (2004).
- 40) 前掲 26)
- 41) 厚生労働省: 介護人材の機能とキャリアパスについて, 第 6 回社会保障審議会福祉部会 福祉人材確保専門委員会, 平成 28 年 10 月 5 日: 10 (2016).
- 42) 厚生労働省: 介護人材の機能とキャリアパスについて 参考資料①, 第 6 回社会保障審議会福祉部会 福祉人材確保専門委員会, 平成 28 年 10 月 5 日: 12-14 (2016).